

審査委員長講評

平成29年度の千葉市小中特別支援学校総合展覧会科学部門は、市内の小中学校から1,000点を超える科学論文、科学工夫作品が出品され、9月15日（金）から18日（月）までの4日間にわたって開催されました。会場となった千葉市科学館には4日間で延べ6,424人の方々を訪れ、熱心に子どもたちの作品を参観されました。4日間の開催となった年度としては、過去最高の来場者であり、60回目を迎えた歴史あるこの展覧会が子どもたち、保護者の皆様、そして市民の皆様の関心の高さを改めて感じることでできる機会となりました。

さて、今年度の作品の傾向としては、科学論文では小学校、中学校共に夏休み期間中だけでなく、1年間を通じて研究した作品や昨年度の取り組みをさらに掘り下げて追究した継続研究が多く見られました。そのような作品の中から推奨作品が多く選ばれていました。

また中学校の研究ではアイデア溢れたテーマやたくさんのデータをもとに客観性を高めている作品が多く見られました。これらは普段の活動で疑問に思ったことや身近なものから、新たな発見を見出し、自ら問題意識を持って研究テーマを設定しているといえます。また、くり返しデータを集めることなどは、日常の理科の授業の中から身につけた学び方が生かされている表れです。この研究を通して得た方法が授業の中で経験として生かされていくことが期待されることです。

小学校の科学工夫作品では、風やゴム、歯車や落下、電気やスイッチの仕組みなどを取り入れ、学年の発達段階に応じた工夫が見られることから、理科の学習内容を生かした作品が多いことを感じました。動力としての道具、材料の工夫、それらの組み合わせ方やスイッチの工夫などによっておもしろい動きを生み出し、作った後に楽しむことのできる作品が多く見られました。

中学校の科学工夫作品では、実用性のある作品が多く見られ、日常生活から出てきた課題に対しての工夫や、生活が便利になるような、まさに工夫された作品が見られました。また展示会場では、作品が実際に動いている場面を映像で見られるようになっており、その作品のおもしろさや工夫されているところが参観者にわかりやすく展示されていたことも好評でした。

また、小学校・中学校とも、夏休みに行われた自由研究相談会に参加した児童生徒の作品も見られ、総合展覧会と連携を持って行っている行事の有効性も感じる事ができました。

千葉市総合展覧会の代表作品が千葉県科学作品展に出品され、大変優秀な成績を納めました。これは上述したように、日頃の学校での理科教育の充実の成果ともいえることができると考えます。今後とも千葉市の総合展覧会科学部門が充実したものとなるとともに、日常の学びを生かし、これらの課題研究への取組を日常の理科の学習に生かすことにつながる行事となることを願っています。

最後になりましたがご尽力いただきました理科主任会の先生方、千葉市教育委員会教育指導課、教育支援課の皆様方に感謝を申しあげ講評とさせていただきます。

千葉市小中特別支援学校総合展覧会科学部門 審査委員長
千葉市立弁天小学校校長 熊代 悟